

## 平成 31 年度第 1 回立川市総合教育会議 議事録

開催日時 令和元年 6 月 27 日（木曜日） 15 時 30 分～17 時 4 分

開催場所 立川市役所 302 会議室

出席者 [構成員] 清水庄平（市長）、小町邦彦（教育長）、松野登（教育長職務代理者）、田中健一（教育委員）、伊藤憲春（教育委員）、嶋田敦子（教育委員）  
[事務局] 栗原寛（総合政策部長）、大野茂（教育部長）、大塚正也（総合政策部企画政策課長）、庄司康洋（教育部教育総務課長）、浅見孝男（教育部学務課長）、前田元（教育部指導課長）、秋武典子（教育部教育支援課長）、南彰彦（教育部学校給食課長）、池田朋之（図書館長）、川崎淳子（統括指導主事）、寺田良太（統括指導主事）

### 議事日程 1. 議題

- (1) 姉妹市提携 60 周年記念サンバーナディノ市訪問の報告について
- (2) 学力向上推進・新規事業の具体的展開について
- (3) コミュニティ・スクールの取組について
- (4) 文化財について

### 2. その他

### 議事録

（清水市長）

ただいまから平成 31 年度の第 1 回総合教育会議を開会いたします。

本日は議題が 4 つございます。皆様方のスムーズな進行に対するご協力をお願いを申し上げます。

### 1. 議題

(1) 姉妹市提携 60 周年記念サンバーナディノ市訪問の報告について

（清水市長）

それでは、まず最初に、議題の 1 であります。「姉妹市提携 60 周年記念サンバーナディノ市訪問の報告について」、これは産業文化スポーツ部長の報告でいいですか。

矢ノ口部長、よろしく申し上げます。

（産業文化スポーツ部長）

産業文化スポーツ部長の矢ノ口でございます。姉妹市提携 60 周年を記念いたしました訪問団で行ってまいりましたので、スライドを見ながらご報告を申し上げます。日程や概要等につきましてはお手元の資料でご確認ください。

出発式は 5 月 23 日、木曜日でした。立川市役所に集合いたしまして、市長、副市長、正副議長にお見送りをいただきました。生徒たちは、昨年 11 月に開催されました「中学生の主張大会」で本選に残りました 15 名で、市から随行もつきまして、総勢 21 名の訪問団となりました。

ただ、この日、その前の週から続いておりました羽田の管制トラブルの影響が続いていまして、予定していました飛行機が、夕方の 4 時 20 分から午後 9 時のフライトになっ

てしまい、5時間余り、かなり空港で待機がございました。生徒たちは、空港でミール・クーポンなども出していただいたおかげで、それぞれ時間を満喫したようです。

初めて海外旅行を経験するという生徒も多くいて、非常に緊張しながらも、出発に向けてわくわくしていました。

今回の訪問団のうち男子生徒は1名のみで、唯一の白一点ということで、市長からもお気遣いの声掛けなどをいただきながらの出発でございました。

機内食は、生徒たちの体感としては真夜中の2時、3時に食事が出てくる状況でしたが、約11時間のフライトを経て、ロサンゼルス空港に到着しました。気温16度で、予想よりはかなり冷えており、半袖ですと肌寒い気候でした。

気候的には砂漠地帯で、年間降水量が300ミリ以下と言われているのですが、今年は非常に異例な気候が続いているということで、5月は長雨が多かったそうです。

翌朝24日、金曜日でございます。かなりぼーっとしていた生徒も何人かいましたけれど、非常に快晴に恵まれ、まずは市内見学ということで、バスでハリウッドからビバリーヒルズ、サンタモニカと回りました。

中央の写真は、アカデミー賞の授賞式でも有名なドルビー・シアターの、レッドカーペットが敷かれる階段のところですか。インスタ映えなどを狙った観光客が多いということで、順番待ちをしながら集合写真を撮りました。

また、日本をテーマにした伝統工芸などが飾られたギャラリーがありました。東京2020に向けてこういった日本文化や伝統品を知っていただくような取り組みがあるということで、かなり多くの方がご覧になっていらっしゃいました。

左下の写真では、皆が足元の星型のプレートを撮っているんですが、これはドナルド・トランプさんの星型です。以前彼がプロデューサーと司会をしていたテレビショーが人気だったという功績でつくられたということで、生徒たちは名前を見つけて集まっています。

ビバリーヒルズからサンタモニカに向けては、青空が広がる中、車窓からの景色も楽しみなが、昼食会場に向かいました。

左下の写真は、映画で有名な20世紀フォックスの本社なんですが、映画好きな方はおわかりでしょうか。中央のビルが映画「ダイ・ハード」で爆破されたビルで、大人たちは非常に「おーっ」という感じだったんですが、生徒たちはかなり昔の映画なので、ピンと来ていない生徒が多かったですけれども、非常に広大なオープンセットなどもつくられていて、アメリカらしいビルの様子でした。

街のあちこちにシェアサイクルが広がっているのがとても印象的で、専用のスマホアプリをダウンロードしますと、マップ上に近くのサイクルステーションが表示されて、QRコードで予約したものでキーをロックし、乗り捨てオーケーというもので、街の至るところにございました。キックスケーターなども実証実験のために設置されていました。

右上の写真がレストランの会場に着いたところで、奥には世界最大級と言われるヨットハーバーが広がっていました。波打ち際にアシカが「パシャッ」とはねていたりして、非常に景観がいい中でランチを楽しみました。

昼食後は姉妹市委員会の方と合流しまして、サンタモニカで海をバックに記念撮影をしました。右下の写真では、生徒が数人足りないんですけども、何人かはバスの中で熟睡していました。

当初の予定ですと、ゲティー美術館の見学を予定していたんですけども、フライトがかなりおくれた都合で予定を変更し、地元のファーマーズマーケットで買い物も体験しました。生徒たちはお土産を選んだり、早速アメリカのコインなどを使って買い物をしたりしていました。

ここからがいよいよ今回の本来の目的でございます、訪問団として務めを果たしてきた第1弾になります。

こちらの写真は、夕方ロサンゼルス在日総領事館の公邸にお伺いしまして、授与式が始まる際の1枚です。今回は日本の生徒に伴奏と独唱をぜひお願いしますと言われて、「君が代」斉唱でスタートいたしました。市内の高校生が引き受けてくれまして、立派にピアノ伴奏と「君が代」の独唱を務めてくれました。

表彰式の様子でございます。授与いただいているのはロサンゼルス総領事の、千葉明総領事でございます。今回は、地元サンバーナディノ市でずっと貢献されていた、姉妹市委員会のアビラ委員長が表彰を受けるというもので、これに対し、清水市長と立川市姉妹市委員会の市川委員長がお祝いのスピーチを述べることになったものです。

この様子は現在、在ロサンゼルス日本国総領事館のホームページでもご紹介をいただいています。庭の風景の写真は、実は一般人には撮影が許可されていませんで、このホームページのみでのお示しになりますが、セキュリティーの都合上、写真を撮る際にも、窓枠の形がわからないようにですとか、建物の外観が入らないようにですとか、いろいろな制約がありましたので、保護者の方にも今ホームページでこの写真が掲載されているのをご紹介している状況です。

表彰式の後、夕食もご招待いただきまして、これはビュッフェを楽しんでいるところです。公邸の中にこういったワインバーといいますが、飲み物を楽しむようなコーナーがありまして、とてもすてきな立食パーティーを体験させていただきました。

地元のメディアからも生徒たちがインタビューをされたり、また、生徒たちの中ではお客様に積極的に「ロサンゼルスのおいしい食べ物は何か」とか、「日本についてどんな印象をお持ちですか」とか、積極的に話しかける生徒もいて、私たちが微笑ましく思っていました。

大変残念ながら清水市長とはここでお別れになりまして、私たちは夕食後、一路サンバーナディノに専用バスで向かいました。

ここからはサンバーナディノの様子です。

翌朝、ホテルの朝食、バイキングでございましたが、私たちが行っているからなのか、和食のお味噌汁などもご用意いただいていた。生徒たちには自分で焼くワッフルが非常に人気で、ワッフルメーカーを使って朝食を楽しむ生徒も多くいました。

この日の午前中は、現地の学生との交流会でした。

左下の写真が、その交流会場となった地元のアートセンターです。アビラ委員長の奥様のアビラ夫人がこの日はコーディネートのお手伝いということで玄関のところで出迎

えてくれました。

この写真の中央の、赤いTシャツの女性が、アビラさんの家の長女、ジェニファーさんで、今回この交流会をコーディネートくださいました。実は彼女、10年前の2009年、ですので50周年の時に立川市の交換留学生として、立川市にいらっしやった経験を持っています。そして、今はその弟さん、写真の左隣の背の高い男性、マイケル君が、現在この立川市に交換高校生として来ていますので、アビラさんご一家は家族ぐるみでこの事業を支援されたり、参加をされている、非常に温かいホストファミリーでございます。

アートセンターの中には展示スペースなどもありまして、日本文化に関する資料、書ですとか、浮世絵に関するものも大変に多く展示されていました。

サロンの壁にとってもたくさんの絵が飾られていたんですけども、全て地元の受刑者の方が更生作業の一環で描かれた絵ということで、非常に独特な色彩のものでしたが、そういったものも多く展示をされていました。また、アメリカのコミックに関する資料もあって、アートセンターらしい、充実した環境になっていました。

ここではサンバーナディノの学生たちは日本語で自己紹介をしましょう、そして、日本から来た生徒たちは英語で自己紹介をしましょうということで、それぞれ名前や学校名などを自分で発表しました。

生徒たちは早速一緒に写真を撮ったり、共同で作業したりしながら、徐々に交流を深めていきました。この日は作業もあり、星型のプレートに色を塗って、全米の被災地に届けるメッセージプレートをつくるボランティア活動のお手伝いをいたしました。アメリカも山火事であったり、ハリケーンであったり、サンバーナディノも被災したときに日本からの支援であったり、逆に日本が被災したときにサンバーナディノからの支援があったりという交流もあり、高校生がこういった社会的な活動に参加している一端を見せていただきました。被災地に送るプレートではありながら、見た人がハッピーな気持ちになるようにつくってくれというオーダーもあったので、とてもカラフルな仕上がりになりました。送るような出来事が無いのが一番かもしれないんですけども、どこかで誰かの目に触れてくれて、輪がつながったら、嬉しいなと思っています。

ここからはランチでございます。本当に大きな大きなサイズのピザやスナックなども用意いただいて、とても楽しくランチをしました。

左下の写真は、今ちょうど日本に来ているタチキッズですけども、手元のスマホアプリなどで翻訳して、「今度ディズニーランドに行くんだけど、何のアトラクションがお勧めですか」とか、「日本の漫画、何が好きですか」とか、それぞれ楽しく会話をしていました。

食事の後は皆でゲームやクイズで楽しみました。左上の写真はサランラップでぐるぐる巻きにされたものを、ミトンをはめながら、ほどいていくというゲームだったんですけども、中から1ドル紙幣やキャンディーなど、いろんなものがぼろぼろ出てきて、すごく盛り上がっていました。テーブルごとに一緒に写真を撮ったり、日本語で答えるクイズと英語で答えるクイズがそれぞれあったりして、歓声を上げながら、とても楽しんでいました。生徒たちの感想の中でも交流の時間がすごく楽しかったと、多くの生徒から聞かれました。

ここからが今回のメインイベントでございます。

夕方から姉妹市提携 60 周年を記念いたしました式典が行われる会場に移動しました。10 年前の 50 周年のときにもランチの式典が開かれたキャスタウェイというレストランなんですけれども、地元ではちょっと高級な、少しおめかしをして予約して行くようなお店のグレードのようで、立川でいいますと、「輝く個店」のような、エクセレントな賞を何年か続けて取っているという、地元でも憧れのお店なんだそうです。非常に小高い場所にありまして、バスが底をすってしまうぐらいの、見晴らしが素敵なレストランでした。

これはレストランの中の写真です。60 周年のお祝いということで、これまでに日本から贈った品々などが展示されていまして。アルバムも多くあったので、それまでに交換留学生の経験のある方などが非常に懐かしく一つ一つ見ながら思い出話が広がっていました。

テーブルごとに立川の生徒も、現地の生徒もお客様もまざっていましたが、中には火消し半纏を着た方もいらっやあって、日本文化に愛着を持ってきているんだなとうれしく思いました。

この式典開会の際にも、また 2 人の国歌斉唱でオープニングを飾っていただきました。アメリカ国歌の独唱は、この事業を創設されたテルマ・プレスさんのお孫さんに当たられるアンドレアさんという方が、非常にすばらしい歌声を聞かせてくれました。サンバーナディノのユースオーケストラのチームもサロンコンサートで数曲お披露目をいただきまして、非常に盛大な中にも荘厳な雰囲気もあり、和やかにパーティーが進行していききました。

中盤では、テルマ・プレスさんがこの事業が始まった当初からの 60 年にわたる思い出話をたくさんご披露いただきました。昭和 34 年、この事業が始まる時にテルマさんが立川に来て、ロータリークラブであったり、ライオンズであったり、ソロプチミストだったり、さまざまな団体を訪問し、スポンサーのご依頼をして回られたというお話もされていましたが、「その間、自分の夫は桜井市長とゴルフをしていたのよ」なんていうエピソードも出て、皆さん当時のことを懐かしく聞いていらっやいました。

立川の生徒たちからはお礼を込めまして、「何か出し物をしてください」と言われていました。立川らしいものと考えまして、東京 2020 のはっぴを着て、立川音頭を披露してまいりました。

これに応える形でユースオーケストラのチームとのハイタッチセレモニーがあつたりして、とても喜んでいただけました。

終了後、サンバーナディノの市長から生徒たち一人一人に、今回アンバサダーを務めた証明書を、一人一人の名前入りで渡していただきました。生徒たちも大変に誇らしく、今回参加できたこと、大役を果たせたことを喜び合いました。

また、アビラさんと市川委員長とが、これからも末永く変わらぬ友好を誓うため、誓約書にサインをして、交換するという場面もありました。

この式典の最後に、2019 タチキッズ 4 名のご紹介がありました。さらに、10 年前に立川にいらっやったジェニファーさんが、「10 年前の経験は自分にとって、

人生を一変させてしまうような輝く経験だった」という話を披露し、お母さんと、姉妹市委員会の事務局をされているジュディさんのお二人に花束贈呈とハグをするのを見て、周りもぐっと感動するような場面もございました。

4時間半にわたるパーティーが終わったのはもう11時近かったんですけれども、生徒たちは大役を果たせて、やっとなほっとしました。

最後の1日は、若干ご褒美も含めてですけれども、ロサンゼルスのアナハイムに移動しまして、ディズニーランドの視察をいたしました。日本のシステムとまた違ったディズニーランドの体験になりましたし、若干雨模様だったんですけれども、生徒たちは最後の1日ということで大変に楽しく堪能し、お土産をたくさん買っておりました。

帰路は、「もう帰りたくない」なんていう生徒も何人かいました。行きと違って帰りは定刻どおり、オンタイムでロサンゼルスを出発することができまして、日付変更線をまたいで28日の火曜の午後、羽田空港に無事に到着しました。

その足で真っすぐ立川市役所に戻りまして、清水市長に大役を果たしてきたことをご報告し、アンバサダーの証明書を手に、市長室で記念撮影をいたしました。生徒たちの体感からしますと、夜中の12時、1時にあたるような時差があったんですけれども、本当に笑顔いっぱい、翌日の学校は若干心配だったんですけれども、迎えにいらした親御さんたちも「子どもたちの表情を見て、とても安心しました」とおっしゃっていました。

この訪問を通じまして生徒たちが学んだ点を、大きく3点ご報告いたします。

何と言っても1つ大きいことは、世界の広さや多様性を体感する経験ができたことです。街の風景や食事、生活習慣、通貨、人の服装、体格も違いますし、一つ一つのことに驚きつつ、生徒たちは短期間でどんどん順応して、お買い物や会話であったり、とても積極的に交流や体験を重ねてくれていました。

2つ目は、コミュニケーションに自信がついた生徒が多かったことです。最初はなかなか英語で話しかけるといのに勇気がなく、生徒たち同士で固まる場面もありましたが、意思疎通ができたときの喜びは格別で、だんだんと表情豊かに、ジェスチャーも大きく、自信たっぷりに、とても明るく会話をするようになったなと感じました。

3点目は、これは生徒本人も帰ってきたときの感想で話していましたが、夏休みに書いた一篇の作文が今回の訪米につながった、やはり何かをやってみることは無駄じゃないと、やれば結果がついてくるんだ、という自信になった。努力すれば道が開くんだということを、生徒本人が話していました。また、今回はこういう臨時の訪問団だったわけですが、これをきっかけにサンバーナディノの交換高校生の試験にぜひチャレンジしてみたいという生徒も何人も連絡をくれています。10年前は残念ながらどなたも受験いただけなかったと聞いているんですが、今回はチャレンジをお待ちしたいと思っています。

前回から改善した点が、1つございます。前ははまだ生徒一人一人が自分のスマホを持っている環境でなかったというのもあるんですけれども、旅行中の様子が全くわからなくて不安だという保護者の声があったと聞いていました。今は中学校にしても小学校にしても、修学旅行やさまざまところで、生徒の様子や給食などを細やかにホームペ

ージなどでアップされていますので、保護者の方から不安のお声があがるのはごもっともだと思いました。

ただ、臨時で行く訪問団ではホームページ等も持っていませんし、また、生徒の名前や顔が出てしまうところではセキュリティー上の問題もあります。どのように共有をしようか悩み、アルバムアプリを活用することにいたしました。合言葉を入れると30日間だけ写真を共有できるアプリがありまして、そこに写真を随時アップしてコメントを入れていきました。私が「ホテルに着きました」とアップしたのに対し、保護者の方が「様子がわかって安心です」とコメントを書き加えていただいたりして、そこは1つ前進できたと思っています。

反省点も幾つかございます。10年前にどういった内容で行ったのか詳細なものが記録として引き継がれていなかったという反省もあるんですけども、1つ目の反省点は、事前に保護者同伴で行ったガイダンスの内容が、交換高校生向けのプログラムだった点です。ホストファミリーとのおつき合いの仕方とか、立川の市史について勉強する時間をとったんですけども、その内容よりは、アメリカの文化や慣習であったり、今回の実際のプログラムに合わせた情報提供がもっとあったほうが良かったという点は、大きい反省点です。

2つ目は、随行者を含めて関係者間の役割分担と情報共有が、事前に不十分だった点です。誰がどこまで何の役割をするのか、例えば、生徒が朝起きてこなくて、部屋に迎えに行くときに、それは本来、随行員なのか添乗員さんなのか。生徒の健康状態についても、事前に看護師さんはヒアリングを受けていたんですけども、随行員も本来はもっと早い段階で共有しておくべきだったのではないかなど反省点もございました。これを踏まえて、次回のときにはぜひ十分な情報共有と役割分担で明確化したいなと思っています。

また、生徒たちはどこに行ってもスマホから目が離せませんでした。食事が運ばれてきても、ホテルに入った途端でも、まずWi-Fiにつないでいる。明日の集合時間の話をしているときにもなかなかスマホが離せない実態もありました。こういう指導をするのは随行者なのか、それとも保護者を含めて事前に周知徹底すべきだったのか、今でも反省と心残りが若干あり、帰りのバスの中で生徒たちと反省会をしました。

最後の3点目です。これはぜひ教育委員会の先生方とも課題共有をしたいんですが、男子生徒の参加を増やす取り組みが課題ではないかと考えています。中学生の主張大会の入賞者という枠がございますが、そこ自体がそもそも女子生徒が多数を占める実態があります。どういうところから選抜をしていくのか、このあたりはぜひ教育委員会のお知恵もいただいて、次回ぜひ多くの男子生徒にもご参加をいただけたらと思っています。

雑駁ではございますが、産業文化スポーツ部からの報告は以上とさせていただきます。

ぜひ同行した職員も今日いますので、コメントを添えていただけたらと思います。秘書課長から。

(秘書課長)

2日間しか行きませんでした。秘書課長、太田と申します。

ですので、サンバーナディノで生徒たちがどんな顔をしているかというのは実は今初めて見るような状態だったんですけど、行く飛行機が5時間おくれたというのもあったんですけど、やっぱり結構まだ市役所でも顔がかたかったですし、ロサンゼルスのホテルでもそんなにまだ会話がなくて、なおかつサンバーナディノに行ったら、いきなり向こうの高校生とかと、知らない顔の人たちと取り組みがあるという、結構不安な感じのことをぼろっと漏らす方はいたんですけども、今こうやって見ていると、もうこんなピースしながら写真撮っているような様子を見ると、彼女たち、彼らは非常に成長したなというのはすごく思いました。

その中ですごく細かい話なんですけど、ハリウッドのときの写真があったかと思うんですけど、ハリウッドのときの写真、先ほど矢ノ口部長がおっしゃっていましたが、いろんなインスタを撮る、各外国の人もいっぱいいる中で、「じゃあ、写真撮るよ」といったとき尻込んじゃうんですね。だんだんだんだんやっぱり自分たちも行っているんだというのが少しずつわかってきて、写真も結構ガイドさんもうまく撮ってくれていたりしたので、そういう経験が少しずつ少しずつ、だんだん彼女、彼らの中で自分はここまでやっていいんだ、人が並んでいるけど、ちゃんとルールさえ守れば、自分が出ていいんだみたいな経験にもなっていたのかなというふうに僕は見ていました。

多少スマホのことでマイナスのことがあったかもしれませんが、本当に全員英語しか話していない中に行けば、そのぐらいは少しはしょうがないのかなと個人的には思っております。

以上です。

(産業文化スポーツ部長)

川崎統括から一言いただけますか。

(統括指導主事)

そうですね、向こうのホテルの方やお店の方のサービスが、日本はウエルカム、「いらっしゃいませ」なんですけど、ため息をつかれたりとか、会計しようと思って持っていくと、「はあー」とため息をつかれたりですとか、ポケットに手を突っ込みながら接客をされたりですとか、本当にある意味合理的な社会だというふうにアメリカは添乗員さんもおっしゃっていましたが、当たり前前に私たちが日本で受けているサービスというのは実は世界では当たり前じゃないのかなという感じが非常にありました。

当たり前前にいろんなそういう優しいサービスを受けている日本の子どもたちというのは向こうの同じ年代の子どもたちと比べると、非常に子どもっぽいという印象がありまして、一緒に並ぶと本当に、立川音頭を踊っているときも「幼稚園の子どもみたいだね」と向こうの方にも言われたんですけども、そういう優しさを持っている反面、いろいろ怖いこととか、そういうところの知識、理解が外国の方に比べると少し弱いところもあるのかな、自立していくというのは日本の子どもたちにとってはかなり長い道のりがあるのかなと思いつつ、一緒にやって過ごしてまいりました。

とても健康面心配していたんですけども、子どもたち、「飛行機酔う」と言っていた子どもも全く酔わずに行って帰ってこられましたし、健康面ではそういった無事に行って来れたなというところが一番よかったかなと思っています。はい。



いろいろご協力ありがとうございました。

(清水市長)

どうも大変ご苦労さまでした。私も途中でどうしても欠かすことのできない会議があったものですから、2泊4日という超特急で行って帰ってきました。

幾つか反省点を申し上げると、やっぱりさっきも事務局も気にしていました、男子が1人だったということで、私も随分私から話しかけて、「僕何でもありません」なんて言いながら、集まると、いつも輪の外にいるんですよ。強がり「平気です」とは言いながら、輪の中に入っているということはなかったですね。いつも輪の外れにいて、「こっち来いよ」と私がいつも呼んで、私の隣に立たせて、みんなとお話をしたり、そんなことをやっていたんですけども、やっぱり2人、3人、最低でも3人ぐらいのグループを組めるぐらい、ちょうど中学2年生、3年生というと、思春期の入り口、大変なときでしょうから、やっぱりそこら辺の配慮は必要かなという気はしていました。

それから、余談になりますけども、アメリカというのは車社会、人口1人当たり1.3台の車があるそうです。ですから、高速道路が片側7車線なんですね。7車線ですよ。私も昔車運転したことがあるんですけども、次にあそこをおりるんだなというときにはよほど数キロ手前から、一番左にいて右でおりの場合には数キロ手前からその位置変更していかないと、インターからおりられなくなっちゃう、そんな経験をしました。だから、そういうのもあって、ロサンゼルスでは自転車のレンタルというか、何というか、スマホで決済もできるような形になっているそうです。それが始まっているようですね。「ああ、なるほどな」と思ったんですけども、大きな流れはそんなところの印象でございました。

特に質問等がありますか。はい。

それでは、報告は以上で終わります。

## (2) 学力向上推進・新規事業の具体的展開について

(清水市長)

次に、議題の2であります「学力向上推進・新規事業の具体的展開について」に移ります。

事務局の指導課長からご説明を願います。

(指導課長)

それでは、私からご説明差し上げます。

まず、平成31年度の学力向上に向けた取り組みについてご報告をさせていただきます。児童・生徒の学力向上につきましては、これまでも小・中学校の授業改善を中心として取り組みを進めてきたところでございます。

ここで昨年度の学力調査等の分析に基づいて、本事業の本年度の施策の方向性を取りまとめましたので、ご報告させていただきます。

まず、表面でございます。昨年度の学力調査結果に基づく分析でございます。

上段は本市の「全国学力・学習状況調査」結果の四分位といたしますが、AからD層に位置づく児童・生徒数の割合について、平成26年度の本市の結果と比較したものでござ

います。多くの項目においてD層に位置づく児童・生徒が減少し、A層の児童・生徒が増加していることがわかります。このことから、これまでの本市における学力向上に向けた取り組みが一定の成果を上げていると考えることができます。一方で、B層とC層のみに着目いたしますと、C層からB層への移行については項目によって違いが見られます。このことから、子どもたち一人一人の習熟の実態に合わせた授業改善を今後も進めていく必要があると考えているところです。

中段に移ります。中段は全国の平均値と本市の平均値の差を平成26年度と昨年度で比較したものでございます。ほぼ全ての項目で向上が見られており、これまでの取り組みの一定の成果と言えるかと思えます。

下段は意識調査結果における国と都の比較でございます。本市の特徴といたしましては、自己肯定感に関する項目において小学校の結果が低く、自主的に学習する項目については小学校・中学校ともに低い傾向が見られることがわかります。このことから、児童・生徒が達成感を感じることができ、みずから取り組みたくなるような授業改善が求められると考えております。

裏面に移ります。裏面につきましては、表面の分析結果に基づき、施策の方向性を6点お示ししてございます。今年度はこの方向性のもと、具体的な事業を展開してまいります。

今年度の主な具体的な事業といたしましては、下段の右側にありますⅥの囲みの5番、小学校教科用図書の採択が挙げられます。市民閲覧会場をこれまでの2カ所から4カ所に増やすとともに、全小学校に教科書を回覧し、市民アンケート及び教職員アンケートを実施することにより、より多くの声を参考にしながら、公平公正な採択を検討することができるようにいたしました。

次に、その左側、Ⅴの囲みの1番、「スタディ・アシスト事業」についてです。昨年度の申し込み者は残念ながら100名弱というところでしたが、今年度は既に104名の申し込みを受け付けており、現在さらに増える見込みで準備を進めているところでございます。

また、4番の科学センター等を活用した事業の充実でございます。今年度は科学センターの受講申し込み者が240名となり、会場の定員を超えるほどの規模での実施となりました。加えて、中学生を対象とした夏季科学講座を計画するなど、充実を図っているところでございます。

また、新しい小学校学習指導要領の全面实施を来年度に控え、外国語活動に対する支援も行っていく予定です。

今後も毎年行われる学力調査の結果を分析し、児童・生徒の学力向上に向けて本事業を充実してまいります。

続いて2枚目をごらんください。外国語活動の推進についてご報告させていただきます。

新しい小学校学習指導要領の全面实施を来年度迎えます。この学習指導要領の大きな変更点としましては、資料の1、背景にお示ししたとおり、小学校第3学年から外国語活動の指導が始まる点にあります。また、5・6年生についてはこれまでの35時間から

70 時間へと指導時間が増加します。こうした状況の中で昭和 22 年（1947 年）から続いている国語科や社会科の指導と異なって、外国語活動については平成 23 年（2011 年）に導入されまして、まだ導入から 8 年程度と歴史が浅く、教員の養成や免許状の対応など、導入当初まだ追いつかない部分があったことから、その指導について教員の経験不足が大きい点が課題となっております。

こうした背景を踏まえ、本市では 2 の囲みにございますように、計画的に外国語指導助手を配置するとともに、その配置時数を拡充し、支援してまいりました。

しかしながら、外国語指導助手の配置だけでは十分な支援とは言えない状況の中で、3 の主な取り組みに示したように、多様な支援を行い、外国語活動の推進をしているところでございます。

まず、教員の研修の充実です。都の英語教育中核教員養成講座を、推進リーダーが配置されていない小学校が市内に 10 校程度ございまして、その小学校 10 校の担当教員が受講し、全小学校において指導のノウハウが持てるように進めております。

次に、授業支援です。中学校校長会の協力を得て、中学校の英語科教員による小学校 3 年生から 6 年生までを対象とした外国語の指導を行っております。

加えて、環境の整備でございます。学務課の協力を得まして、デジタル教科書等の配備に即座に対応できるような ICT の環境の整備ができており、小学校では来年度に向け、外国語のデジタル教科書も配備する予定で整備を進めているところでございます。

さらには体験活動の充実でございます。姉妹都市中学生サミットによる英語の活用や国文学研究資料館との連携による百人ぐりっしゅの実施など、英語を活用した体験的な取り組みの充実も進めているところでございます。

今後も児童・生徒の外国語の学びが知識だけに偏ることなく、体験的な学びやコミュニケーションの大切なツールとして活用することができるように取り組みを進めてまいります。

ご報告は以上でございます。

（清水市長）

ただいまの報告に対しまして、ご質問等がございましたら、お願いをしたいと思います。

田中委員。

（田中委員）

前田指導課長、ご説明ありがとうございました。今説明いただいた学力向上関係、31 年度のこの学力向上推進事業、これを踏まえながら、今市の結果をご報告されまして、うれしいことに 26 年度と 30 年度、これを比較した中で全体的に非常に成果として大きく伸びている、このことについてはうれしく思っております。

とりわけ、その後の立川市の傾向、あとは方策の方向性、これらを一つ一つ拝見いたしますと、非常に緻密に、しかも、計画的に、かつ体系的に取り組んでいるということで、高く評価しております。

また、改めて、あと、2 番目、英語関係ですけれども、これについても外国語活動の推進、これについても一つ一つの背景、また、全面実施に向けての対応、行う取り組みと、

一つ一つこのようにきちんと進めてこられて当市の非常に学力が上がってきている、これについては改めて清水市長はじめ関係の皆様の大きな力添えがあり、また、関係部局の皆様にご確保していただきました。そのことについてはこの場を通して心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

それで、1点だけ提言をさせていただきたいと思います。先ほど課長からもありました自己肯定感、これが国及び都の平均と比較して若干低い傾向にあるということですので、私から学校と家庭側から提言をいたします。

まず、学校では、この真の学び、この成立状況を子どもの側から再度見直すことが重要ではないかと思えます。例えば、真の学びの視点からですと、第一に子どもが、学ぶことが楽しいことであると、こういう意識をしっかりと高めていくということが必要ではないでしょうか。当然楽しくなければ、それは真の学びにはつながらないと、そういうふうに考えているところでございます。

あと、第二に、学ぶことが心の成長につながるということでもあります。学校をこれまで以上に子どもたちが成長するための場所であると、そういう意識をしっかりと持たせていくということが必要ではないかと思えます。

3点目ですが、将来に役立つことであると、こういうことをしっかりと子どもが自覚できるような、そういう取り組みが必要であると思えます。そもそも学びとは何かということですが、子どもが将来なりたい自分を目指して伸びていく、自己形成が重要であると、そのように私は考えております。

したがって、この3つの真の学びを学校は子どもたちに意味をみずから見出させ、みずから主体的に取り組む能動的な学びにすることが必要であると思えます。このことが結果として、自信を高め、自分が周囲からも受け入れられるという感情、自己肯定感と同時に自分も周囲の仲間を受け入れるという感情である他者肯定感、この2つが持てるようになっていくのではないかと思いますので、ぜひ今後ご検討いただきたいと思えます。

あとは、最後に、家庭の側ですが、これについても子どもの自己肯定感、これを高めるために、よりよい家庭を築くということに尽きると思えます。例えば、具体的には第一に、自由でくつろげる、ほっとするような家庭。第二に、家族同士が共感し合える家庭。第三に一人の人間としてお互いに人格を認め合える家庭。夢とか目標に向かって誰もが頑張れる家庭。これが自己肯定感を高めるのではないかと、そのように思っております。学校と逆に家庭が学校と同じような勉強のことばかりを言っている家庭、あるいは家族同士に信頼関係のない家庭、あるいは愚痴や文句ばかり言っている家庭ではなかなか子どもが自己肯定感、あるいは他者肯定感が育ちにくいのではないかと、そんなことも含めながら、今後教育現場にこのことを発信していただけるとありがたいと思えます。

私からは以上でございます。

(清水市長)

ただいま4点にわたってご提言がございましたけれども、教育委員会ではこのことについて答弁というか、考え方というか、お示しできますか。

指導課長。

(指導課長)

どうもありがとうございました。私どもといたしましては、各学校に対して、各学校の授業改善、その実践を通して家庭や地域に問いかけていくこと、そういった授業づくりというのが各学校で進めることができるように各学校支援していくとともに、各学校のそうした取り組みが家庭や地域に発信されて、その学校の問いかけが家庭や地域の教育そのものに働きかけていけるような、そういった、学校も私たちも一緒になって地域や家庭に働きかけていけるような、そういった授業改善というのが進められるように今後も各学校を支援してまいりたいと考えているところでございます。

そういった我々、立川市の子どもたちを取り囲んでいる多くの大人たちが子どもたちに有機的に働きかけて、子どもたちを承認して、子どもたちを励ましていくことができれば、子どもたちの自己肯定感や自主的な学びの姿の成長というのが期待できると考えておりますので、先ほど申しましたように、各学校が実践で地域に問うことができるような、そんな支援を各学校に対してしていきたいと考えているところでございます。

以上です。

(清水市長)

ありがとうございました。

よろしいですか。はい。

ほかにございますか。

松野委員。

(松野委員)

ありがとうございます。30年度は本当にA層が伸びて、D層が改善されて、目に見えるような成長がありました。ありがとうございます。

今年度のいわゆる学力向上について幾つか提案がありましたが、私、大体分析するのが全国の学力の、あるいは東京都の分析結果でこういうことやりますよ、ああいうことやりますよ。だけど、なかなか過程が見えない。取り組み状況、成果。私これは何とかわかるようにできないのかなど。つまり、「立川スタンダード20」、どの程度定着しているか、何%行われているんでしょうか、定着しているんでしょうか。

あるいは一番骨子、大事だなと思うのは、習熟度に応じた施策がありますね。これが一体どのように、参加者はどのぐらいで、「地域未来塾」ですか、どういう成果を得ているだろうか、大変興味深いんですね。

それから、学習力の向上の問題も、大体実施している学級ってどのぐらいあるんだろう。

こういうのをもし出していただければ、取り組み状況によって学力の向上、あるいは理由がよくわかる。いかがでしょうか。そういう取り組みはできないものでしょうか。質問いたします。

(清水市長)

指導課長。

(指導課長)

ありがとうございます。今現在こうした学力調査の分析に関しては、まさに委員からご提言いただいたとおり、「立川スタンダード」に関連づけた分析、問題を「立川スタンダード」と比較しながら、どこの部分に弱点があるから、こうした結果が見られるんだ、そういった関連づけができるかどうか、本年度はその分析にトライしようと考えているところでございます。

また、習熟度別少人数指導についてはちょうど今指導主事を派遣して各学校の実施状況を把握しているところでございますが、子どもたちの実態に応じた適切な指導というのが行われているのかどうか、毎年各学校の実施状況を確認しながら、その充実を進めているところでございますので、そうしたご報告がどのような形でできるのか、前向きに検討しながら、来年度の分析結果に生かせるように考えていきたいと思っております。

以上です。

(清水市長)

よろしいですか。

はい、松野委員。

(松野委員)

ありがとうございます。いつも結果と、そして、こういうことをやりますよという提案のみで、中がなかなかないというのが、これが欲しい。中が埋まってくるようなら、非常にわかりやすい学力向上の取り組みだなと思っておりますので、ぜひお願いいたします。

以上です。

(清水市長)

ほかにございますか、ご発言の方。

ないようでございますので、この件については終了といたします。

### (3) コミュニティ・スクールの取組について

(清水市長)

次に、議題の3であります。「コミュニティ・スクールの取組について」に移ります。立川第五中学校の小沼校長先生、ご説明をお願いいたします。

(立川第五中学校校長)

立川第五中学校の校長、小沼です。本日本校の取組みをご紹介します。ありがとうございます。

私、地声でやるのが主義なものですので、マイクを使いません。申しわけありません。タイトルです。「コミュニティ・スクール「地域と共に成長する学校を目指して」」ということで、本校の地域、いろいろな教育資源がたくさんあります。そういう方々の力、もしくは伝統、歴史というものを学校の中に導入し、活用できないかということでこの6年間取り組んでまいりました。最初は「砂川楽」、楽しんで学ぼうということで、砂川を楽しむということで、「砂川楽」。市民科が創設されたので、最終的に市民科に今シフトをしている段階のその経過をご報告いたします。

「何故、地域の教育資源活用に取り組むのか」。実は第五中学校区には第九小学校があります。150周年をもうすぐ迎えます。市では今年第一小学校が創立150周年を迎える、

そういう流れの中でまさに本校と市全体が目指しているものというのは、ここにお示したように、ほとんどかぶっているんですね。

ネットワーク型学校経営。砂川という町でネットワークを最初構築し始めたんですけど、より広く。

さらに持続可能な学校支援システム、人材としてはシルバー世代の方々をたくさんお迎えしているんですが、これも世代交代をしていかななくちゃいけない、そういう部分も含めて考えていく。

あと、本校の教育課題です。5つ挙げたんですけども、この部分をどういうふうに克服するか。実は大きな声では言えないんですけども、生活指導の充実、これは私が着任したときの一番の筆頭の課題でした。子どもたちにどういう状況があるから、生活指導の課題になるのか。実際に幾つかの視点があったんですけど、この中では2つ目、3つ目、4つ目、働く、学ぶという意欲を高めなくちゃいけない。さらには一緒に地域とともに自分たちを高めるんだ、自分もその地域地盤の一人なんだと、参画意識を持たせなくちゃいけない。さらにはその部分では、幾ら中学校頑張っても、3年間では厳しいから、小・中連携の中でつくっていくんだ。こういう部分でまさに工夫しなくちゃいけないということが見えてきます。

実際にそれを取り組むにしても何が引っかかってくるのか。自己肯定感が一人一人を見ていくと、どうしても厳しい。先ほどの発表、2番目のところで指導課長のお話にも出たんですけども、この部分をどうやってやっていくか。幾ら声をかけても上がらない。道徳、人権の意識を高めながらやっていく。でも、やっぱり限界がある。

さらに2番目です。学習習慣の未定着。これについても非常に時間をかけてやらなくちゃいけないものがありました。

勤労観、職業観の未熟さ。先輩を見ると、「ああ、これでも生きていけるんだ」、そういうことを独り言のように言う子どもも私が赴任したころにいました。結構ショックでした。

じゃあ、どうやって進めるか。2つの柱を立てました。

「キャリア教育」に注目しよう。職業を育てるという意味から始まるんですけども、さらには一人一人の社会的・職業的自立を目指す意識、これをいろんな手立てを講じてつくっていこう。それをキャリア発達と捉える。平成23年のとこで出ている中教審の部分でもキャリア発達をどう捉えるのか。社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方、これを取り組んでいくことを子どもたちに中学校のときにどんどん発信しようじゃないか、これを始めました。

市民科を基軸とし、「砂川楽」や3年前より始めました市民科にシフトしていく。ここでも2つの柱を全校で意識しながら今取り組んでいる最中です。自分のよさをちゃんと伝えるんだ。おためごかしにじゃなくて、きちんと育てる。さらにはこれを学校の中で完結するように、協働するんじゃなくて、地域の方々のご支援をいただきながら、つくっていくんだ。

具体的にその組織は今現在、昨年度からコミュニティ・スクールを始めさせてもらっているんですけども、学校運営協議会をトップに置きました。左の下の部分で、緑色

の1つ、教育活動、これは中学校、五中を指します。小・中連携ということで、本校区には3つの小学校がありますけども、支援コーディネーターをセンターとして小中学校の連携に改めて取り組みました。

さらに学校の外にあるんですけども、学校運営協議会のスタッフの人に、支援コーディネーターの方がトップに立つ地域学校協働本部、これを組織して、表現で言うと、協議会の下部組織が協働本部に見えてしまうんですけども、ほぼ意識的には並列で動いています。この協働本部の方をコーディネーターにお願いしているんですけども、非常に活動してくれます。いろんな地縁、血縁を駆使して学校を応援してくれます。学校とともに多様な機関にどんどんアプローチをかける。この方々の力を学校の中で導入することで子どもたちの意識というのがどんどん変わりつつあります。今年も実は明日がこの「砂川楽」、1年生の取り組みに当たる日なんですけども、子どもたちはここで地域の人たちと改めて出会う。路上で会ってもまた挨拶をしている。地域の方々からもものすごく反響をいただいているので、とてもうれしいスタートラインを1年でつくる、それがやっとレールに乗りました。

「キャリア発達に向けて1」、自立に向けてということで、先ほど挙げた部分は実は教科、道徳、総合的な学習含めて多様な部分にほんのちよっとずつ足がおりていますということで、クロスカリキュラムみたいな形になるんですけども、いろんなところに関連づけて全体で取り組んでいます。ここに書き出しているものが具体的に、どんなところとネットワークを組んでいるかの部分です。挙げると切りがないので、この程度にしました。

2つ目です。学校協働本部の支援についてはどういうことをやるのか。実際には開かれた学校ということで、地域の方々にもどんどん入っていただくということを前提にしました。ただ、学校のセキュリティーという部分に関係しますので、実際にはコーディネーターの推薦をいただいた上できちっと人物を把握させていただき、具体的には校長が面接させていただくんですけども、そういう流れの中で今取り組んでいるところです。

そして、冒頭でお話ししたように、「砂川楽」という考えがいまだに残っています。小学校で類する方々に幾つかパーツで指導を受けている子どもたちが中一に入ってきます。地域固有文化とか、そういうものをいろいろと1年生では教わります。武蔵野文化である小麦を使っているうどんの手打ち、そういうところから始まっているいろんな砂川に残っているものを学びます。

実際にこの延長上に職場体験学習、5日間の実施を入れています。実際に本校では220名前後の生徒が第2学年に在籍する形が毎年なんですけども、これを5日間で引き受けていただく、そういう方々を招聘するのは、実は学校が少しずつよくなり、それが口コミでどんどん広がったことによって今いい方向に進んでいる、これが子どもたちに職場で認めてもらえるという体感をつくり出しました。

「砂川楽」の3です。コーディネーターを核とした支援組織について改めてここで書かせてもらいましたが、下の赤の部分になります。実施にこぎつける部分でやはり頼んだねではなかなか進まない。2倍、3倍の時間をかけてコーディネーターの方が紹介してくれた方と授業に対して、取り組みに対して十分な打ち合わせを行う、丁寧な打ち合



わせを行う、これが「砂川楽」の成否のキーポイントになる、そう感じました。これを手を抜いてしまうと、おそらく地域の方々の学校に対する理解を裏切ってしまう、そういうことになるんだと思って今丁寧に取り組んでいるところです。

その様子です。写真を示しました。平成31年度、今年は12団体で取り組みます。こんな取り組みをしています。地域の方に生け花を教わる、もしくはいろいろな団体の活動をご指導いただく。左上では実際にこれは豆腐をつくっている写真ですね。うちの学校のすぐ近くにお豆腐屋さんがある、お豆腐の工場です。そこの社長においでいただいて、子どもたちに物づくりへの興味を持つように発問をしてもらう。その中でお豆腐をつくって、そして、味見をしてみる。子どもたちはほんとうに驚きます。「ああ、科学的なバックボーンに裏づけられて、こういうものはできているんだ」と再確認するんですね。

さて、実際に来ていただいた方々にはこうやって記念撮影をして写真をお送りするんですけども、毎年この写真を積み重ねるのが好きだということでおいでいただくこともだんだん増えてきました。

さて、職場体験、2年生のところですか。1年生で種まきをし、2年生で5日間行います。実際に「来年はもう結構です」と言われないように今どんどん工夫をして取り組みをしている最中です。

工夫の1つ目は、1年生のときに専修専門学校に体験入学に出す、こういうことをやっていました。ただ、限られた時間の中でやっていく部分ではこれは厳しいので、来年度からは専修専門学校の体験入学というのは別なメニューに変えます。具体的に後ほどそれをお話しします。

さて、2年生で救命救急講習があります。これは昨年度から制度化されたものです。私どもの学校では実はこれをその前、2年生のところで立川消防署、それから、砂川出張所、そして、防火婦人の会、それから、赤十字の女性の支援団体、そういう方々にお願ひして自前でやっていたんですが、これが組織立って行われることになったので、また新しい取り組みを昨年度から始めています。これは3年生でその取り組みをしているところの記念写真です。具体的にどこでやっているのかというと、今度は市の防災課の方々とリンクする、もしくは消防団の方々とリンクする。そういう中で各町会に分かれて子どもたちに実際に救命救急防具の復習をやったり、いざ地震が起こったときに組み立て便所はどうやってつくるか、実際に子どもたちに組み立てさせます。そして、それをもう1回実習します。そんなことを含めていざというときの対応を担うのはやっぱり若者なんだということを今意識づけを行っているところです。

生徒の変容です。振り返りには幾つものことが出てきています。お手元に資料がありますので、後ほどお読みいただければと思います。

市民性の変容、市民科を起点にして学校支援がどんどん拡大しつつある中で、生徒会からもっと自分たちが打って出ようじゃないか、逆に参加していただいた市民の方々からは、もっと参加したい、またはいろんなかかわりをもっと広げたい、そういうご要望をいただいているのはとてもうれしい限りです。地域に貢献する意欲が高まる。

さて、これで地域理解、地域にかかわるだけではちょっと寂しいなということで、今

次のポイントに向かっているのがここです。来年になると、今年から具体的に始めるんですが、中学校1年で「地域研究」、「多摩シビック・プライド」、この2つのポイントをどう生かすのかを今やっています。レポートを高い次元で完成させようじゃないか、地域の。うかつに褒めない。具体的に子どもたちが手に汗して、頭を悩めてつくり出したものに対して初めて評価をする。その中で認められるという意識。その中でもっともっと生涯にわたって学ぼうじゃないか、働こうじゃないか、そういうものを考える、その先に冒頭に出たような地域に貢献しようとする意欲を重ねることによって生涯にわたって学び続ける、働き続ける、関与し続ける子どもをつくれないうか。それはおそらくはこの市民科で求めるところの1つの方向だと捉えます。

さて、学校運営協議会の組織等については、もう既に皆様ご存じのとおりだと思うんですが、現段階ではこんなふうに取り組んでいます。学校運営評議員の会のところから運営協議会に移りました。スタッフも変えました。具体的には青少健の方、保護司の方、元都立高校の管理職、元大学講師、ブレーンとしていろんな部分で、地域に入ってしまうとわからない、私のように学校の中にはまってしまうとわからなくなるんじゃないかと、もっと高いところ、もしくは別の視点から俯瞰していただく方のアドバイスをもらいながら、学校の方向を軌道修正する、そんなことを今取り組んで組織づくりをやっています。

全体の流れについてはここに文章化したものでお手元にあります、見てください。

さて、コミュニティ・スクールをこれから持続して運営するに当たって気をつけていることを大きく3点出しました。

実際に学校管理で行っているわけですが、やっぱりヒト・モノ・カネ、そして、時間とソフトウェアをどのように有効に生かすのかというのが求められているカリキュラムマネジメントにかかってくる部分なんですけども、もっと私たちは研究しなくちゃいけない。今、本校は、地域の関心をたくさんお持ちいただいています。これに対して職員が39名いるんですが、みんなが金太郎あめで答えられるような徹底ができていない。改めて状況がよくなってきたからこそ、職員の共通理解と実戦をしなくちゃいけない。具体的に次期後継委員の啓発も含めて今頑張っているところです。

以上です。駆け足でしたが、どうもありがとうございました。(拍手)

(清水市長)

ただいまの「コミュニティ・スクールの取組について」のご報告に関しまして、ご質問等がございましたら、お受けします。

伊藤委員。

(伊藤委員)

本当にありがとうございます。まさに先ほどあった自己肯定感をどうするかというものの答えが今のお話の中にあつたような気がいたしております。やはり周りの者に認められていくことでどんどん子どもたちのやる気は出てくると思っております。

集合写真に大勢の子どもたちがいましたけれども、私が前に五中に伺わせていただいて、上からご挨拶をさせていただいたときに、あの子どもたちの目、こちらを見る目を見てぞくぞくとしたんですね。このような経験、ほかの中学校でも初めてのことで

した。何しろ子どもたちが本当に生き生きと大人の話を開こう、どうやって自分たちがよくなるかという感じをつくづくと感じさせていただいたところで、このように頑張っていたいて、先ほどのお話にありましたように、いつも、これから先もずっと同じような形ができるようにしていただければと思います。ありがとうございます。感想ということです。

(清水市長)

感想ということでございます。

はい、松野委員。

(松野委員)

私も似たような感想なんです、私は体育大会、もう見るのは必ず入場行進なんです。いや、すごかったですね。600名以上いますよね。で、やはり私も体育科をやっております、指導の徹底を一番図るんですが、子どもたちの行進ぶりを見ていますと、あれは指導じゃなくて、子どもたち自身が一人一人がやろうとしているんです。これが今伊藤委員が言われた、周りの人に認めてもらうというか、お互いにそのことをつくり上げる、もうそれがはっきりわかるんですね。特に行進って難しくて、姿勢もそうですが、足は1、3拍左足なんですね。これは見事なんです。驚きました。

さらに驚いたのが、今の発表で、いや、コミュニティ・スクールも、私もただただ学校支援の延長線だと、なかなかこれはうまくいかないぞと思っていたら、ちゃんと市民性の変容とありまして、「砂川楽」参加の市民から、その前に生徒会から、今度地域のお祭り参加企画を提案したい、つまり、町に出るわけです、子どもが。企画に参加する。このことがあると、私はいよいよコミュニティ・スクールも本格始動だなとすごくうれしくなりました。ありがとうございます。

以上です。

(立川第五中学校校長)

朝礼で報告させていただきます。

(清水市長)

嶋田委員。

(嶋田委員)

ありがとうございます。私も伊藤委員とか、松野委員と同じように、やはり自己肯定感のところで、先ほど学力向上のところで話が出ましたけれども、自分にはいいところがあるとか、先生はあなたのよいところを認めてくれているというところで約2割の子どもがそうではないと思っているということなので、そこのところを多くの大人と接することによって自分にはいいところがあるんだとか、自分を認めてくれる大人もいるんだと思えるということはとても子どもたちにいい影響を与えますと思いますので、ぜひこれからもよろしく願いいたします。

あと、1つ質問なんですけれども、やはり先生方が仕事が増えるんじゃないとか、何かご心配を持っていらっしゃる面があるんじゃないかと思ったんですけれども、先生方の意識はいかがでしょうか。

(清水市長)

小沼先生。

(立川第五中学校校長)

お答えいたします。まさに委員のご指摘のような部分を転勤してきた、異動してきた職員には最初に言ってあります。うちの学校においていただいたときに、できるだけ地域の方々と接してもらおう場を意識して学校側ではつくろうとしています。学校長であったり、管理職が上から目線で言っているんじゃないでなくて、同僚が行って感じてきたことを報告する。その中で、共有する中からは行かなくちゃ、やらなくちゃ。保護者や地域がこういうことを感じて、こういうことを求めている、それを感じてもらうことによって具体的に動いていく。そうすると、やらされている感がないというのは結構疲弊にはならないですね。ですから、一生懸命やってくれます。そういう形を画策しないと、ただ、実働時間は長くなります。はい。

以上です。

(清水市長)

よろしいですか。はい。

田中委員。

(田中委員)

私が最後になります。よろしく願いいたします。改めて小沼孝行校長先生のリーダーシップ、それをもとにしてこのコミュニティ・スクールの改善をされながら、頑張っておられること、高く評価するとともに、心から敬意を表しているところです。

その上で、丁寧に説明をいただいております。大事なことが幾つもあるので、そこで、あえて3点ほどお伺いします。

まず、1点目です。今後のコミュニティ・スクールのビジョンについて、先生ご自身が昨年、今年で2年目、あとは来年が3年目と、その中でどのようなビジョンを持って取り組もうとされておられるのかということでございます。

あと、2点目は、学校へのフィードバックについてでございます。これについては学校運営協議会の委員の方には学校に対する保護者の要望、あるいは地域のニーズ、そういうことを学校運営に反映させるということが実はこのコミュニティ・スクールの大きな趣旨の1つなんですよね。そこで、この協議の結果に関する情報について、住民とか、あるいは保護者の方にどのように情報提供され、それを学校にどのようにフィードバックされておられますかということでお尋ねします。

最後です。学校運営のこの評議、あるいは改善のサイクルの取り組みについてでございます。学校運営協議会と学校関係者評価、これを一体に推進することは学校運営の評価、改善サイクルの充実につながると考えております。したがって、このことについてどのようにそれに取り組んでおられますかということ。

以上3点でございます。よろしく願いいたします。

(清水市長)

今の3点目のご質問にあった改善というのは、これはコミュニティ・スクールの内容についての改善ですか。

(田中委員)

おっしゃるとおりです。

(清水市長)

学校の運営。

(田中委員)

実はコミュニティ・スクールのこの役割の中には学校運営の評価とか、改善サイクル、それをうたっているんですね。それについてどのように取り組んでおられるかということです。

(清水市長)

そうすると、1点目とかぶりませんか？ 今後どうして運営していくか。

(田中委員)

この1点目は、今2年目に入っていますよね。したがって、これまでの課題を踏まえて、コミュニティ・スクール3年目はどのようにご自分で学校運営協議会の運営を進めようと考えておられますか、ということでもあります。

(清水市長)

今後どうするか。

(田中委員)

今後、どう課題を踏まえて、どう改善工夫を図るかということでございます。

(清水市長)

で、当然、到達点はこうですということであるなら、小沼先生、3点の整理、難しいと、混ざっていてもしょうがないですね。はい。そういうことで、よろしく願います。

小沼先生。

(立川第五中学校校長)

1つ目です。今後のビジョンについてというお話だったんですけども、今後のビジョンについては、子どもたちの向上を目指すために、どういうふうに知恵をいただくかということで今動いています。ですので、動きながら、次の目標、小さな目標を探していく。最終的に子どもたちに何を出そうかということ、やはり人生100年、ついこの前の朝礼でも言ったんですが、今中学校1年の子どもたちは、イギリスの学者によれば、2人に1人は107歳まで生きるというのが先般発表されました。そうすると、子どもたち、今これから90年以上生きるわけですから、2人に1人以上。その中でどういう自分の目標をつくるのか。それをつくるためにぜひビジョン、これで中学校義務教育の1つの区切り目なので、子どもたちに種をまくとしたら、何が必要なのか。それを発信するための知恵をいただこう。そのための運営組織になってほしいと今年から来年にかけては言っていると思っています。ただ、やらねばならないことが多過ぎます。ですけども、それをやらないと義務教育の最後の3年間としてはまずいだろうと認識しています。ですので、これをヒントだけでも今年と来年でつかみたいと思います。

さて、1番目のポイントと3番目のポイントに飛んじゃうんですけども、では、そのために評価と改善をどうするのかと私は捉えています。

具体的に言いますと、その流れの中で学校全体に対して今後数年間、影響、評価も含

めてなんですけども、とる項目は変えられないので、文章表記の中でそういう部分の要望であったり、考え方をいただいこうと思っています。それをもとにして、学校の分掌組織に新たな係をつくる。で、具体的に言うと、学校運営協議会の諮問に対して応えるような分担をつくる。そういう形でやったいこうと思っています。おかげさまで学校全体の組織というのはかなりマイナスの部分、生活指導に対する部分というのは軽減されてきています。ですから、その部分を、人的勢力を移して取り組んでいく、諮問に応答する部署をつくる、そのことを今考えている最中です。

そして、2番目になる部分です。学校へのフィードバックということなんですけども、その流れの中で学識経験者の方々に今年何名も入っていただいたんですけども、まさにそこがフィードバックする出発点になります。まず、今年度、昨年度から今年度は職員に対してフィードバックすることを重点にしています。学校運営協議会のスタッフがわざと教育課程に対しても事前に私どもで方向づけをしたことについて赤を入れていただく。その赤を入れていただいた内容というのは、実はほかの学校運営協議会のスタッフに対して、「ああ、そうなんだ」、腑に落ちる方向づけを示してもらう。そうすると、その内容が職員に改めて別な視点から落ちる。具体的にその過程を今年度の後半から来年度にかけては地域の方々、保護者にも発信する。具体的には今日というか、既に今年のホームページには枝分かれをして学校運営協議会の報告ページというのをつくって盛り込む方向で今準備しています。第1回の今年度のところから徐々に報告の内容を増やしていく、そういう形で地域への公開をしていく。それがフィードバックになっていく、そういうふうに捉えています。結果は必ず出せるように頑張っているところです。

以上です。

(清水市長)

田中委員。

(田中委員)

今3点について非常にすっきりした回答をいただきました。これからますますコミュニティ・スクールの実施運営は大事になってまいりますので、いろんな面から期待を申し上げますので、どうぞよろしく願いいたします。

私からは以上です。

(清水市長)

それでは、4人の委員さん全員からご質問・ご意見がございましたので、この件につきましてはこれで終了といたします。

(4) 文化財について

(清水市長)

では、次に議題の4であります。「文化財について」に移ります。

事務局の生涯学習推進センターの文化財係長からご説明を願います。

(文化財係長)

生涯学習推進センター文化財係長の浦島と申します。生涯学習推進センターから文化財についてご報告させていただきます。

お手元の資料、立川市指定文化財等一覧をごらんください。

現在立川市内には国宝を含む国指定等が4件、それから、都指定が2件、市指定が28件、合計34件の指定文化財等があります。

主なものとしましては、国宝「六面石幢」、国指定史跡の「玉川上水」、また、都指定有形文化財の「立川原合戦戦死者供養鉦鼓」、都指定史跡の「立川氏館跡」、また、市の指定としましては、指定有形文化財の「公私日記」、また、市指定史跡の「柴崎分水」など、各分野の文化財が指定されております。

次に、甲州街道の沿線沿い、近隣市の状況をご報告させていただきます。

調布市、府中市、国立市、日野市などになりますが、ここで特徴的なこととしましては、表の中の括弧の内数をごらんください。各市の文化財行政が平成の30年間に積極的に文化財保護に取り組んでいることが見取れるかと思えます。このような状況は平成31年4月に施行されました文化財保護法及び地方教育行政の運営に関する法律の一部改正の趣旨にありますように、過疎化、少子高齢化などの背景に文化財の滅失や散逸などの防止が緊急の課題であり、未指定も含めた文化財をまちづくりに活かしつつ、地域総がかりでその継承に取り組んでいくことが必要であり、このためには文化財の計画的な保存・活用の推進や地方文化財保護行政の推進力の強化を図るという近年の文化財の保存と活用のあり方が法の一部改正につながったと思われまます。

本市におきましては、滅失の危機から文化財を指定したことにより保存が図られたものとしまして、①の「小林家住宅」ですとか②の「須崎邸内蔵」などがあります。一方で、災害で焼失、また、損傷したものとしまして、③の普濟寺の開山しました「物外可什像」、また、④の「普濟寺保存の板碑群」、写真はありますが、「諏訪神社本殿」ですとか、「八幡神社本殿」があります。また、近年の保存維持管理の取り組みとしまして、⑤の「満願寺跡」の保存管理ですとか、「小林家住宅」の茅葺屋根の補修、また、阿豆佐味天神社本殿の保存修理などが挙げられます。

阿豆佐味天神社の保存修理の工事について触れさせていただきます。この事業は平成29年度から今年度までの3年間の事業として取り組んでいるところですが、今年7月で現地の保存修理の工事を終了いたしております。今後、文化財の活用事業としまして、10月に広く市民の皆様にごらんいただけるような特別公開事業などを予定しております。

この保存修理事業では①番目の下地に群青色の模様が彩色されました「支輪板」が、そこの彩色復元におきまして施されていた群青色の塗料をかき落としたりしたところ、下から、②の写真、ひし形の文様が確認されました。この本殿の創建時、1741年に近いと思われる時代の彩色が確認され、これをもとに③のように墨色のひし形の文様に復元できたことはこの文化財の保存修理事業の成果の1つとしてあったと考えております。

次に、国宝の六面石幢ですが、1361（延文六）年に建立されたもので、大正2年に旧法で国宝として指定を受け、また、昭和28年の現文化財保護法においても再指定されております。特徴としては考古資料であり、また、美術工芸的な彫刻資料でもあり、また、建立物でもあるという、この3つの分野要素から構成されている有形文化財だということです。

この国宝につきましては、所有者からの要望を受けまして、国庫補助を活用した移設、修理事業として検討が進められてきました。所有者は市史編さんで行った調査から、六

面石幢自体の劣化が進み、修復が必要な状況であること、また、現行の保存庫の環境のままでは劣化を防止することが難しいこと、さらに現在の立地場所が土砂災害警戒区域の指定を受けていることから、安全な場所への移設が必要であることを挙げ、今回の要望に至っております。これは国宝所在の自治体としまして、本市や都を経由しまして文化庁に伝達し、数回にわたる文化庁と都による現地調査及び協議を行ってまいりました。

その結果、文化庁では土砂災害警戒区域からの移設、六面石幢自体の劣化に対する修理、修理後の安全な保存場所への設置の3つの内容で国庫補助事業として調整を開始し、年内の交付決定をめどに調整を今進めているところです。

この国庫補助事業が採択されますと、国宝所在の自治体として本市に次のような役割が生じます。文化財保護法及び補助金執行関連法令の規定に基づきまして、文化庁への手続の経由事務のほか、国・都の指示によります国宝所有者への指揮・監督、事務補助などの支援。また、国の指示により所有者が設置する国宝の保存活用方法を検討する専門委員会の委員として参加及び事務局を担うこと。建設予定地が都指定史跡、「立川氏館跡」にあるために、市が主導する埋蔵文化財調査が必要になること、そのほか修復後の国宝の積極的な公開についての取り組みの検討などが挙げられます。

最後になりますが、指定文化財以外の文化財、市民の皆様から歴史民俗資料館に寄贈、もしくは寄託されるさまざまな文化財についての状況について報告いたします。

ごらんのように、歴史民俗資料館には年間、相当な点数の文化財が寄贈・寄託されています。これらにつきましては受け入れ処置後に一点一点文化財の分野・分類ごとに調査を行い、台帳に記録、どういったものであるのか、研究考察を加えて文化財資料として資料の性質に適した環境で保管し、その上でさらに活用にも努めています。文化財資料の利用・活用というところでは、市史編さんに着手しました平成27年度以降増加の傾向にあります。

なお、この作業には専門的な知識を必要とするため、学芸員資格を持った者が当たっておりますが、現行の体制ですが、収集の段階でも地域とのかかわりがある資料などに限定するように精査しておりますが、それでも寄贈・寄託の件数に対して調査が追いつかず、未調査の文化財が確実に増えているのが現状です。

未調査のままでは、将来の活用はもちろんです、保管の要、不要の判断ができない状態になっております。また、市史編さんで収集された資料につきましても保管及び将来にわたっての活用が必要になりますので、適切な保管場所の確保と円滑な活用が可能となるシステムを構築することが急務と考えております。

文化財についての報告は以上です。清聴ありがとうございます。

(清水市長)

文化財に関する報告が以上でございますが、ご質問がございますか。

田中委員。

(田中委員)

今浦島係長から非常に丁寧な説明をいただいたんですが、改めてこの立川市の唯一で、全国に誇るべき国宝である六面石幢、これは初めの修理事業の計画となりますね。今後移設、それと補修、大事な事業を一つ一つ行うわけですけれども、多大なご苦勞をおか



けしますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私からは以上です。

(清水市長)

ほかにご発言の方いらっしゃいますか。

特にないようでございます。

## 2. その他

(清水市長)

そのほか議題以外のことにつきましてでございますが、議事録の確認、あるいは次回の総合教育会議の開催について事務局の企画政策課長から説明をいたします。

(企画政策課長)

本日の議事録でございます。作成後、皆様にご発言等のご確認をお願いしたいと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。確認後にはホームページ、それから、市役所3階の市政情報コーナーにて公開をさせていただきます。

また、次回の総合教育会議につきましては、10月10日の木曜日、15時30分から、今度は208、209、2階の会議室で開催を予定しております。よろしくお願いいたします。

以上でございます。

(清水市長)

今事務局からご説明がございましたけれども、このことについてはご意見ございますか。よろしいですか。

それでは、ないということでございますので、これをもって平成31年度第1回立川市総合教育会議を閉会とさせていただきます。どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。